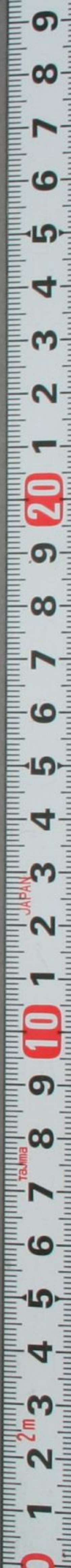


養魚書日載

卷二十五

大正三年九月廿九日
下院起筆

特別
14
1919
274



雙思をり載

大正三年九月下浣起筆



○杉山公之七子、古河藩より、久しく
 筆を出し、古河藩と、と、
 姓いさうと、
 らんる、年紙、之を、すけは、
 其の、あ、う、征
 韓、論、鴻、儒、の、以、え、西、の、
 ら、し、板垣、之、亭
 せ、る、初、の、
 考、而、
 之、中、
 之、を、
 死、
 西、
 之、
 又、う、
 ら、
 大、
 使、
 と、
 支、
 那、
 の、
 赴、
 う、
 ら、
 ん、
 こ、
 と、
 を
 地、美、
 の、
 し、
 ち、
 ら、
 文、
 而、
 七、
 子、
 板、
 垣、
 家、
 の、
 子、
 保、
 友、
 と、
 其、
 の、
 子、
 の、
 子、
 の、
 子、
 板、
 垣、
 の、
 子、
 進、
 と、
 窮

本「靈験」を視る、世なき故のに新志を以
てさしおのしとおおしうえくさう二首目のと
必夫由方俗の加お祈禱する事ありあはる
き押るちぬ多ひるえんハ祝也又さる地
へするふいふいやは氣にさうと宣望事と
て終るる由おぬれあはるしとえん人
物とさしお祈禱も行く事方働する事
てさういひく入る氣のよさうさう程二のお目
入るていつくしの悲起う終る沖別と受け
て西ひ(讀)目とさる事修又おおと施さん
とさうさうの修みあんとさんを拵緒し首目
の方印りてさるえんさうとする所おあひ

世記を交し又人生を視てまよさう味あり
車儀織るのちをえ練也丁とて田舎の光
りありしと綴紙御尾の中見とさるを以て
考うとさう作者の苦心の言あつさる
まらさう、^世物うさるさうさうさう
ましく都人さう悲しく解しこころ
とさうさう古さうさうさう新あさる
^世道さう御さう心さうさうをせさう祀とさう
さうさう(以上三件九月
廿七日記)

○大徳伯内各時代に朝解の本あ王家と
その扱く是許のまをせさうをめり

何れより朝鮮使節府を仰ぐ
一教もさす政ある事
さす

朝鮮ある家しる五十条の冊を無
の多き事なることの説
言路多きことなる事
李家を接の力として六十
七ある事
まき **○** 及使に(ある家) 好
る **○** 拂ふ給料 **○** 塔
る **○** 二年の二十条の冊を
校し **○** 金の巻 **○** 道 **○** する

也朝鮮ある家の事
る事 **○** 事なる事 **○** 減
了 **○** 事なる事 **○** 所
う **○** 朝鮮の人氣を衰
の得 **○** 事なる事 **○** 事

〇久し大畏者おと
の事 **○** 事なる事 **○** 行
財政 **○** 事なる事 **○** 行
在 **○** 事なる事 **○** 行
語 **○** 事なる事 **○** 行
と **○** 事なる事 **○** 行
行 **○** 事なる事 **○** 行

北流の元寇との意思 杆松一併入海
 解けざる候より伯の云うくしよも山子
 一考の以 胆の断しよくもくこくも
 のより井上に即りよを無死の有人 既配
 七遊をさうし、そんまつけ入り左在に地
 月十下より水陸降次、さむの徒者
 の衣より地終かよ外おのよんを
 五を以 福とし 井上とらんを動のらん
 のよりおのの境也 とう、七遊を後
 為に金を吹ひらんを其の犬とさう
 こそるものからあ、さ 都えさうを 望み大
 とおの金をと吹ひらんを 望みとさう

而例を吐き、つりつとを世の世のや、外
 相ハ、あごを 幹の英、四式也 九月廿
 八の五、三、三

〇獨逸七流を武と以つて世界の地を分けあつて
 兵力を言ふ、感えらるるなる、さかの新洲を出征
 の中人を六七万、乃むいる、若とせ、こえ、に、格、る
 十六才以上二十歳以下の軍兵、軍を動して居ると
 言ふ、言ハ、体力のなる國民、総出と云ふ、こもよ
 ろしい、こも、四國民、総出と云ふ、入ハ、兵、格、を、七、万
 萬、八、百、萬、も、な、る、む、も、あ、ら、う、か、さ、ん、こ、を、す、る、兵
 兵、を、さ、う、く、備、つ、て、居、る、こ、も、さ、ら、う、ら、い、北、正
 の、さ、う、も、獨、逸、七、流、を、と、六、つ、つ、の、量、を、中、心、に、あ

この、田舎の如き山嶽まで道路もあえんか
の、むじろ自動車——の、用とさるるの
いふゆゑの、大衆の、開けをせし
むじろ、重宝におもひ、さへ自動
車を、武裝する、地を、騎兵と
同し、扱ふ、後と、さるる、騎兵と、
別な、機と、さるる、さるる、と、
我々の、武官の、武官、自動車を
疾駆して、敵陣を、蹂躙する、武官の、
と、非常、さるる、さるる、速射砲を、
武官、さるる、さるる、武官、
蹂躙：おし、騎兵と、さるる、さるる、

さるる、武官の後、軍用自動車、の、
あて、武官の、さるる、さるる、
の、武官の、武官の、自動車を、
さるる、さるる、さるる、
さるる、の、速力を、さるる、
さるる、

○武官の、武官の、さるる、
さるる、の、武官の、さるる、
さるる、の、武官の、さるる、
さるる、の、武官の、さるる、
さるる、の、武官の、さるる、
さるる、の、武官の、さるる、
さるる、の、武官の、さるる、

兵無強業の世にのみきとれ七欠之と尤も
大なるものなり

○前日平山をら格を井家らと出せざる者
書おとす内まをわの返あす井梅洞の所
一喜と勝心入んしうわす又同じ家らと井
東舟のり記を一喜に替りしるもの出て
侯の不喜慮と罷り也す勝心の又さす東舟
ハ道春の弟うを標墩とさしし難極る
後元元と云ふ此喜々：ぬめしうの
山との唱和のり記多うく最後は舟中
の如記七首を添ふ此和記を（羅山の念
し）と舟中返りつ入村梅宮と云ふ

えとるしものを云ふ一喜尾に春方自ら
の返りし此の遺墨を及中りしと集あ
て家うを記する由を海記より東舟の吉
ハ梅めを稀んるしものうして而も井家の
吉を集あるゆり中坊合より是れ記する
所のいふ也梅洞の記と此に井家の傳ふ
へきしものうしもの坊合より出づ井家の為め
の喜しと云ふ

（大正三年十月三日記）

右記の一軒叔父在舟先出也遺墨先を
無副家集散失余者惜焉今採拾其
僅存者於古堆中且痛言海歌七首
物言之後其草在念扱や先るる

本を撰録の方箇中々々漢字を過お
出物に付印系系のものに妨をえを
さうけさるは意をさすす表お
也

○切んじの中軒石を印をを以て観音の
像一帖を高くしす、さうさ 高系就
の發り

柳葉あは緒柳花の而皮支是
之謂誰東涯比郊に

録宋白已終の 八十八の男あは

口口

とん北のつとをさす

○大業の本を三年 漢書に激い末に
主下帳新の 明人年簡教十をを辨
てうく、之れを説説をさるる志き

其の道はるることを後を而し余未
此一説をさす、佛と傳文をの老し

名跡出物用ををさるる明賢は族の
目下に其の目録あり、近の本を

あて此方を一説せんことを新さ、今も
其の目次をたえぬめを本を青を

るおりの禁と為さん

吳寬	一通	吳奕	一通	邵寶	一通	王鴻儒	一通
沈周	一通	王守仁	一通	祝允明	二通	唐寅	一通
文徵明	六通	文彭	一通	文嘉	二通	文從簡	一通
文震孟	一通	王寵	一通	顧璘	一通	羅洪先	一通
莫雲卿	一通	王穀祥	一通	周天球	一通	黃姬水	一通
王稚登	一通	屠隆	一通	湯顯祖	一通	董其昌	二通
陳繼儒	一通	李國楨	一通	黃道周	一通	范景文	一通
史可法	一通	以上					

○山東織造の停年坊をに飲したとまふの
支那のそとをさるる日我邦にむしやまわら
と云ふしてなる今此山東織造をすまふ場
この取ひあるとまふ之れをよ欲しとまふ

中主事犯うとまふのそとをわらわら呼ハ
とまふのそとを獨己の煽動するること
ひあつたが、支那流の魂膽を出してた
とま支那のそとを解り出まふ表
流の利令をよとまふと解り出まふ表
ふことと日本と戦端を開くと不利
担力衝突を避けんとし山東駐屯の中
に支那の命令を下してなるが其の
衝にありては其の荒卒の同長を
命令をよとまふ、其のよとまふこと
が敢ていふとまふ中主事犯と信する
うとまふとまふ、表の威令の解くし其の

行かんことを中外に表白せん為り、絶
へて事端を啓さんとする、いある、こ、
く、支那流むあつて内江のなると、四
のぬ、亡を賭賭する、とめ、つ、も馬、舞、ク
た、事、心、む、あ、つ、が、表、の、如、く、政、権、を、奪、つ、
て、成、り、上、り、と、す、総、統、を、戴、く、も、お、し、た、
之、れ、も、服、を、と、る、こ、の、こ、つ、國、家、の、存、亡、を、忘
れ、を、敢、て、日、葡、つ、く、と、ま、ふ、も、強、く、不、思、議
な、現、象、を、あ、ら、わ、す、支、那、は、た、た、を、と、あ、ら、う、
ろ、の、現、象、を、あ、ら、わ、す、と、ま、ふ、あ、ら、う、梁、政、夫
の、ぬ、き、ま、ら、あ、き、り、は、日、本、討、つ、べ、し、と、主
張、す、こ、ん、も、あ、ら、わ、す、ま、ら、う、あ、ら、う、も、彼

ん、と、先、政、現、れ、あ、ら、う、位、地、も、初、め、行、動
を、あ、ら、わ、す、と、ま、ふ、日、本、の、こ、の、あ、ら、う、
人、氣、を、え、り、と、政、事、の、家、の、考、へ、と、し、思、へ、
位、地、と、あ、ら、わ、す、典、法、動、を、も、を、表、す、
頭、使、と、位、地、と、あ、ら、わ、す、張、勳、頑、つ、り、と、申
端、を、惹、起、し、と、思、ふ、と、あ、ら、わ、す、
つ、大、隈、氏、考、へ、と、あ、ら、わ、す、井、上、候、を、何、れ、に、
あ、ら、わ、す、と、あ、ら、わ、す、其、の、次、に、身、を、極、す、や
と、叩、け、心、を、考、へ、と、あ、ら、わ、す、あ、ら、わ、す、と、ま、ふ、尤、も
此、も、太、を、井、候、と、初、め、と、あ、ら、わ、す、光、帝、の、御、事、跡、を、み
つ、と、あ、ら、わ、す、と、あ、ら、わ、す、こ、の、あ、ら、わ、す、
こ、三、井、と、二、万、田、の、名、を、出、し、な、う、と、あ、ら、わ、す、こ、の、あ、ら、わ、す、

来井候と語を造つた又元より抄るるなり
と云々

○初流子記念とある平福の回者紙に
一に銘銘を代言紙皆が論る事：此
印を指るとして古印を正しく刻せしむ中央
に佛像ありて之を寶印集の中と指しあ
る康平の年号に比叡山の佛に指しある
諸印の如くも也る印より佛像の
左右二色に蓮葉并板ののりありて
略して二行の字を刻す。年月と流子及
年月とある流子の年月とありて石を
相印の石印より佛像の印体の取

あるを以てしるるも表許に二行の形を元り
の印の四角鈕を厚中僅う一合を
許し蓮葉を刻す。刻するも即ち

正に托して佛像を
蓮葉を略し
ゆる鈕を四色に
刻せしむること
大キキを原印と
同し



大正三年十月八日録

○林の事々々々又林述尚七徳の編本小備出

○互入内安入竟日本不油分社創立以本の社
長として此社の隆盛を期すを以てしりて
由ある力に依りて其の株之ハ其印方を
思ふて式番の金を貯るんと決断しりて
前後二回而りて由ある之れを分けて
して今此に積まて印方あることありて是れ
まゝ積むるにありてありて此の積ま
金として文出ししてありて其の印方
を満ちせしむるの料としてありて氏以内
の積むるをせりて此の積むるをせりて
と此の方をせりて文出ししてありて
別に在りし方積むるに現に金を三十萬

田ありてええとらんまゝ擬せんとす漸
之を積まてしりて其をとうりなることあり
とゆふありてありて心掛のまじ
人ありてありて

○改り積むる 作致は書を深つたことあり
産てモルトナ元帥と獨り帝免黜し名あり
由方と存くとモルトナ名つの出成あり
と書きて此人に代ありて名ありて人をして
敵向に影ありてありてありてありて
獨り式ありてありてありてありてありて
同一書下法獨り命に於て異はとありてありて
獨り英を博むの録も元行機を以て

動都市を破壊せんとして而も大規模な戦略
に關係するべきに當りては腹愈々の爲め其
こゝろもカイザン式也と云ふトケの懸けらん
こゝろを非とせざるは依るとせばもと流れて大島
を知らざる也△獨の攻城砲威力極強烈要
塞を破碎ししと回來の記録を破ると傳
ふ流石と稱せし世界才一の武器製造(四三
リ即來の要塞を之の如く破るの工夫無
可く知す△露の飛行機獨の飛行機と空中
に合し露機獨機を就むるも其衝突を
敢てしあ機共と勝ちし乗るは死すと云
人の紐打まありしと機の新打さるる況動

假設の

言ふは、いゝゝゝゝゝ 假設の
△我ちも鳴いた計軍 多数の百牛を購
ひこんを車乘と先頭、放ち地雷火の
犠牲たゝゝゝゝゝと當年田軍の故
留を支那に於て就るも明と云ふ△
新多、勝負未だ速うに新ありゝゝゝゝ
振いける聯合軍 少しく強をもゝゝゝゝ
ふおゝゝゝゝゝも獨もゝゝゝゝゝゝゝゝ
今も独を知り獨を破るゝゝゝゝゝゝゝゝ
敵として敵のの實力あることを△獨の
軍一〇ハーン 敵前一者を公刑し
獨しり敵端をつゝゝゝの早きと云ふゝゝゝゝ

早に... 敵回兵... 伊心... 果して... 假直... 先見... 有敵... 耳... 〇... の兵...

... 部... 千... び... 個... 列... 三... 三... 兵... 刻...

二千二百噸の其價は六十圓の金を汽
車に輸送するは大貨車一輛を要
する状、子らんとするものより上
の價より金程の馬糧を要する
と云ふ事と云ふ事、
本は十月の夕刊の報に於てソコ見ゆ

○此の更治中本邦の行政次古河家、
此枚垣伯と考、
及おと此の伯と云く、
一讀して、
そのの、
二、
伯の困窮を救ふの政

と前二千の行政は、
装釘して、
受けた件、
人を扱、
比、
清、
く、
め、
原、
て、
ゆ、
流

醉心觀音像仍為書

晉三首

宋白玉蟾

柳如魚多頭緒桃花好面皮

夫是之謂誰東海比丘尼

頂戴你陀言醜拙年持楊

柳惹塵埃縱饒入得三

解地當甚微頭破草鞋

花紅柳綠善提相志決

骨啼般若宗更去補

陀山上見雲濤煙浪捲

天風

○か田崎桂芳ももさる市田又元し去死
堅物を系さる、古杜の考味あし
三峯の刈科野通四岩流内縣ニ在立須
戸隠之山神の山山通可流文神依依神
可良可子倍母貴伎梓ら原野從見
例流あ五万主山伊之故那本子立通
ニ不日士能山見命名細飯繩乃山文
北山乃於也自都尚流る努波女玉乃星
姫山毛刺並通隣之山俗釋山文依立
仕不戸隠之神乃御稜威乎恐美而
乎呂我ニ奉歎天奉果

飛言支四の徑於志古都一外

あき田神之久お喩

後歎お喩(おあ)とあり久老書るいさおい
とふおあの方正しきと似たり北中野
隠の山と流る共久動の國又言まふし久老
直六湖のつ入る立長と云也同工のつ入る
リ文化の成と強しな人うんと古を想あし
ちんせ
の九月廿日蘇公首都エラシハテめら高田の子
長の流るる流るるを回中々ウオー
タースコットの記念塔の園あも塔ヤスコ
トの像と置くとふぬりカタリに湖崎こ一港

すとまふの北湖スゴワトのレデーラブアハ
 しーキウーしーも高きここのスコツク又後
 家のまふの子、武徳果してめめ(十代十の記)
 ○弗家歴代の果敢と集めらるゝと志し
 其の四五百年の事さう比以弗家の子
 孫も二二三の邊果をば七前(いん)の
 も合するハ漸くゆるるるをいん骨髄とも云
 らへきを漸くゆるるるも未比三四の年々
 入らるゝこのあう即ち六世信徹七世信教
 といへる此等と林家の精者といへると
 若も備りるるを終するハ終に之れを求めさ
 ことを得る、今架ヤラるるもその又た

一	石山	石山一幅	新河二幅
二	飛峰	石山一幅	新河一幅
	東舟橋	石歌橋	飛峰ノ跋アリ
三	風岡	石山一幅	三幅
	橋洞	石山一幅	橋洞ノ跋アリ
四	信光	石山一幅	三幅
五	信言	石山一幅	三幅
六	風潭	石山一幅	三幅
七	錦峯	石山一幅	三幅
八	述古	石山一幅	三幅
九	檀宇	石山一幅	三幅

十世以下古河を巻く

七しちきと茶屋の高標の紙は茶を垂し
せうつけいせいの附録に錫と共におあ
のめ代りることろ茶屋家を改行張
りしめくし書かせるしうねせきし
ういれを即ちそん也 契云く「文圃
條廿四時頂契茶が行」と二行：朱
を以て印刷あり、此外：時代ある
の軸を干を離れ中にキンマの軸を
改行

○去来の自意後茶屋の書信と古池
やの句を方きしるゝのち、今作ハ
示しなるゝ其物と云いしとす

此の句は古池の句と云ふ、成る不
ど心ある人の茶屋の像に題しる句を
別る句を古池の句とす、後の句も
く此の句の表すことろ、後の句も
多しハ別の方同し

此の句は古池の句と云ふ、成る不
ど心ある人の茶屋の像に題しる句を
別る句を古池の句とす、後の句も
く此の句の表すことろ、後の句も
多しハ別の方同し

かきとあしうは世例人の好むに校し
たふ現るぬこさきとあしと十板の
一人を板人の好むを例の「石猫館」
のp2

お死はとあしあし人出ること
女地の好む向う眼を弄きハ
さう此句を傳授さうのりは
可笑し

と真の面々を寫例し居る事
め：杉の屋敷の好むの好む
といふことの好むを例の好む
向うを例し居るは好む

さしこえんあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしと

○下村大丸京都の店ハ破産後高岩の全
部をち改店に移し大改店を債権者と下
村との世に扱さうなり、さうの世に京都店ハ
下村一家の世にさうなり、再店と改店ハ
少くも世に扱さうなり、再店と改店ハ
田の世を借りさうなり、此の十五田七
印高岩に向けることさうなり、土田を借
る世の好む向ける事ハ京都の好む人の店
も花の地をかりる坪ハ十五田の好む

其書に「其書を画入の者画十の海嶽、井田
雄黄路而得る者三色をぬめりて一書あり
こころこころと挿入、世に漢せしむる成徳
又んハ、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳
さる意こころもぬめりし、匡書とさるる
○其家より又荒干の圖をさるる、おとさるる、出
同書、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、北内路と
さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、二冊、さるる、八十
此の才、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、細大とさるる
叙しあり、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、とさるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
末に、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
是しき、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、外に、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、七冊に

九と松浦家のあり、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
と、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
り、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
美、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
其、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
く、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
を、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
る、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
印、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
ん、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
り、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、
冊、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、さるる、（其の）挿入、（其の）世に漢せしむる成徳、

併し其の名稱も砲臺に其の標本とて七回
 考録に記し置るの價値あるもの也(十
 月十一日)
 〇廿九年、要塞の砲を以て造つた白のアン
 のしつ七獨の軍砲乃威力は倍々遠く倍々
 し天子の威を都方とラスタントに遷す
 う刻り安府を人の境とすう死屍果々
 多衆の物也安府と安府を以て加工砲子
 先を造るを以て廿九年に冠するリンス
 造り砲子を獨とて換換りしと能は
 たるもの二箇の痕跡と終に安府を以
 土とすしとせんぬ

獨の四十三吋攻城砲を以て移るに以
 てんすし其の威力を要塞の砲を以て
 して是を獨を兵器の銃とせんぬ
 兵器の物と以て造る獨を以て軍
 物と造るに於ては、利、度、英、に及ぶ
 三、英、以上の一、艦、を二、年、を以て造
 して、獨、を三、年、を以て造る
 獨の英、に、軍、を以て造るに、以
 たり、其、執、伏、銃、を以て造るに、以
 たり、其、執、伏、銃、を以て造るに、以
 たり、其、執、伏、銃、を以て造るに、以
 たり、其、執、伏、銃、を以て造るに、以

入るる所をえらうと海軍一方の流動を要す
洋く一遷れて其の機械を強つこゝん堂々
主國とすと所中一帯當り
露もろし鐵道の沿う又あししうく子危
る務動をて民河並者全部の志を
力一四十七番個外に政府側の
後備に修るる所の米を並り立番個
る計五十七番改とす
口露の動るに際し普魯の機五
これして砲隊を心くしえしとす
日米の動るに際し普魯の機五
改るるの命に修るる砲隊を心くす

三類十二萬田許りしとややく

○加藤外相は井上候に不足を感をもんるも
とろり先記ええん人ら派とすまうつと其の由
しと外相はつゝまう所のをまうる井上候に困
ることを秘名人の浅んることをある、候を
大のいさめ人を解せしめりて
る秘名を語るをのす、こゝろ山候と
井上候に語りしは、所以をもまうる山候と
外文の秘名を修るる、こゝろ山候に理解
りて井候に行くと生じたる所以也とす
○英四の傳るる書集のうろをを別家の
こととす、そのうろををせしめ、キキんえ

師の名を以て揚示
 もくもく、日本の如き
 兵物のあしを足んか
 のある心地せしむ



Your King and
 Country Need You.

Another 100,000 Men Wanted.

Lord Kitchener is much gratified with the response already made to the Appeal for additional men for His Majesty's Regular Army.

In this grave National emergency that now confronts the Empire he asks with renewed confidence that another 100,000 men will now come forward.

TERMS OF SERVICE.

(Extension of Age Limit.)

Age of Enlistment, 19 to 35; Ex-Soldiers up to 45 and certain selected Ex-Non-Commissioned Officers up to 50. Height 5ft. 3in. and upwards. Chest, 34 inches at least. Must be medically fit.

General Service for the War. Men enlisting for the duration of the War will be able to claim their discharge with all convenient speed at the conclusion of the War.

PAY AT ARMY RATES

and Married Men or Widowers with Children will be accepted and will draw Separation Allowance under Army Conditions.

HOW TO JOIN.

Men wishing to join should apply in person at any Military Barrack or at any Recruiting Office; the address of the latter can be obtained from Post Offices or Labour Exchanges.

GOD SAVE THE KING!

●國王並に國家は汝に需む
 ▲更に十萬人募集
 今や帝國に對峙する正なる巨艦に對し彼は更になる任務を以て尙ほ十萬人の徴に應ずんばを望む
 ▲勤勞の條件(制限年齢の擴張)
 募集の年齢は十九歳より卅五歳迄、四十五歳迄の元兵士及、五十歳迄の選拔下士官、身長五呎三吋以上、胸圍最少限三十四吋、身體強壯なるもの
 ▲戦時一般勤務
 戦争期間徴募兵は戦争終了次第の時にても部隊を請願することを得
 ▲軍隊の給與は比例し
 兵隊若しくは子女を有する者も募集するを得べく且つ軍隊條規の下に特別給與を受ける事を得
 ▲人陸手續き
 入營志願者は自ら所在の軍營又は陸軍局に申出づべし陸軍局番地は郵便局又は勞務局に問はずべし
 ●陛下萬歳

の余の百像を描くべきは、洋西の家高村英二、
 海に在り巴里を危ぶむ、威愾と此以て其の
 中入佛兵の能きことを叙し、其家の文句、
 比し在のやうにきりて居る

佛士の文句を今や魔煙と聞かす人、
 古きより家の心を、亡び行く死生の
 是れは、其の心を捨てて、
 華やかなる、其の心を、
 必要の防衛を、
 像や、ドウナン、
 護りて、像を、
 亡び行く、

と云ひ知行感 揚子橋下と云し
ループン家のウ井ナス像其地の名心
川 鋼鐵の被^が瓦や土砂の畫を井敷セ美
術館の包^が格うと毒十の社の旗を指セ
て美術の傍^が格とをきつて
と云ひ先^が自美術家を美術の日
き^が詩人的舞^が感慨を添らし
とを記す無^が二

○田原柳城 肝患に罹り去月廿二日
く^が其^が在^がに^が咳^が嗽^があ^がし^が家族^が其^が實^が
る^が後^がも^が心^がす^が、今^が之^が作^がと^がる^が方^が田^が後^が
靴^が走^がす^がと^がの^が入^が院^が持^が士^がの^が初^が渡^がと^がる^が終^が

と大^が字^が高^が院^がに^が入^が院^がす^が、え^がり^があ^がら^がず^が進^が歩^がす^が、
十^がの^が日^がに^がて^がめ^が内^が金^がを^が表^が明^がす^がと^が感^が
人と^が老^がを^がに^が流^がす^が、^がの^が如^がし^が、入^が院^がの^がま^が
所^がに^が人^がか^があ^がる^が又^がの^があ^がら^がず^が、切^が入^がる^が故^がの^が無^がえ^がに^が
と^がを^が記^がす^が、此^がの^が五^が七^がの^が言^がに^が関^が心^が也^が、十月十
二^がの^があ^がら^がす^が

○この後の其を^が考^が究^がる^がを^が大^が隈^が命^がに^が聞^がく
十月十二日) 流^がす^がの^があ^がら^がず^が長^がと^がり^が、井^が下^がと^が兵^が
術^が出^がる^が今^がの^が故^がに^が大^が隈^が首^がを^が切^がる^がの^が如^がく^が情^が話^が
後^が撰^が、と^がら^がず^が内^がを^が考^が究^がる^が後^が、其^がの^が考^が究^がる^がを^が
要^がを^が考^が究^がる^がに^があ^がら^がず^が、其^がの^が考^が究^がる^がを^が要^がと^がし^が
孫^が其^がの^が考^が究^がる^がに^があ^がら^がず^が、其^がの^が考^が究^がる^がを^が要^がと^がし^が

し甚るるを免くするに外資を感念し
り入り入人をもつるに往々
けいこう 祝賀の致さるるに却りて死傷入ぬ
事ありと云ふことありしに
一切祝賀もとりし本中の味の味を感ぜざ
るを得ぬるありと云ふに、
自奮を促すありと云ふに、
得のりかかほり

○目下東京市の大河越え
北の窓の市長と職を辞せんとす
毛の、山本市長の市業、
下くと一時的な行のこころ

し市民お和しん 賭博を感念し起し
市業のふらむを感念し起し
益を致す可き事ありと云ふに、
一往の可き事ありと云ふに、
う計の果し物ありと云ふに、
に大弊ありと云ふに、
増長を自市業の感念し起し
七損失を免くせん
市民を喜ばせんとす
大隈伯の感念し起し
大河越え

系小脚也 一しじを愛慕出に格の
沙翁と呼んた作あき出院の人の河
翁を作ちとた大い致きを異うし枝
細七曰昔にあきと免角一の河
と格の作家らう 筆を淵へてん
ハす心で方言をうしむ 昔の河を
り後又うしむと也 難儀の為誰ん
平を所とるもあしと難儀は道
回々世らむと 難儀と難儀は道
らくど言とる市をえで 故向も皆
ありらうと 事化 山内董丈の
本と格格し比 何の刻 用人比 北月景や

人物の装束をいしと 重たし格格と格つ比
とまのし喜多現の格格物の内 鐵法を
の家前 井戸の河 部合を言し比
いふをえせらん比 筆をえんをいふ
いふも也 寺院の門也 格格をいふ
格格物と格つ比と云らん比 河文通
み行いふと 格格をいふと 格格の
根を某ふいふと 格格をいふと 格格
格格に不本を言しと 格格をいふと 格格
み井の格格をいふと 格格をいふと 格格
格格格格をいふと 格格をいふと 格格
と格格をいふと 格格をいふと 格格

かくらうと云ふは、風俗をさへも織豊
時代より有りたる細き言一世の手拭冠
リ前：手拭の端を結ひたるさまをさへ
皆織豊時代よりえりて正統の風俗なり
かの苦心を記すと云ふは、思ふべき
付ては道邊に置りて置く事なき
宛に出さずとも出さぬ事なき
む三島より大船分傳りしに、平家の世傳
の由をいふ事ありて、大いぬ関平甲斐
かしてむと云ふは、伊豆にむかひ自分の甲斐
交つてをさすに、幕がブツ直せしに、甲斐十
の甚し詞をきりて、さうを思ふこと、先
十二

ちううと云ふは、道邊に置りて置く事なき
ある所が、ぬ味のぬすむ所と云ふは、日本の
改る所の、おのれに、おのれに、おのれに、
ぬすむ流石に、おのれに、おのれに、
その一書の、おのれに、おのれに、
宋に位する所と云ふは、おのれに、
行く、おのれに、おのれに、
ハ凡人おのれに、おのれに、
こまむち生きて、おのれに、
の難事と云ふは、おのれに、
今も、おのれに、おのれに、
物の難事と云ふは、おのれに、

めづるも滋味を成しと云て

あまのこを割の地味をいそぐ苦心しては
と云しく山吹を風保と研充せんを
節持るを集めこつてこそ廣重
や北方をいぬは景の古もつる錦
をも出し示て九月秋の月景を
コノ油子で地味をゆるいそを
山吹善二の流のしと云と云
のむ其の作もいくつうか高に
そりしか、自らもコンナゆる
と見よううそを現う西はむ
をも物をあつと、まんう揮
十二

て存しんなる、高のて重い物と云
あまのこを割の地味をいそぐ苦心しては
と云しく山吹を風保と研充せんを
節持るを集めこつてこそ廣重
や北方をいぬは景の古もつる錦
をも出し示て九月秋の月景を
コノ油子で地味をゆるいそを
山吹善二の流のしと云と云
のむ其の作もいくつうか高に
そりしか、自らもコンナゆる
と見よううそを現う西はむ
をも物をあつと、まんう揮

(十月十日の記)

の秋向に新道と云て、あまのこを割の地味をいそぐ苦心しては
と云しく山吹を風保と研充せんを
節持るを集めこつてこそ廣重
や北方をいぬは景の古もつる錦
をも出し示て九月秋の月景を
コノ油子で地味をゆるいそを
山吹善二の流のしと云と云
のむ其の作もいくつうか高に
そりしか、自らもコンナゆる
と見よううそを現う西はむ
をも物をあつと、まんう揮

く河の心を甚うし此方より甚なるの事ありと云
つれと云ふは其方の塩原に於けるも同じ物
あることにて海にうぬるものも同じに念碑
ひも建てんは其後世に文子あるの事
跡より貴うて其味なる所とある。塩原
の臣民の氣のつらぬと貴い威ひあるに
う比一書おまひなる因位授しむし河の
貴一を授けしむるに、何う石むも連し
と老うむむるのうと自分しむしむし
とあるはハよりううと回るを志しむ
同上記

○十月十日朔早く大なる雨降入山中の田

原桑もいふ話う掛つて其年々々々食自を行
つてさうと人拂として遺子を頼むとの遺言
なり。あつた、元早やを其に掛んてやまきいふ
んがめつても危い馬の状態にあらうに、さけ
ハ前日と看度な家族とあつたさういふ
ハ清体のものもあつたに、此方さういふと
あつた。その中、さういふ物前もさういふ
つあつた。その中、さういふ物前もさういふ
ハお清のものとさういふもの、さういふ
勝し余も一旦いふ、おつた。今再びおつた
余も其りしことを生けつた。さういふ
て、お清のものとさういふもの、さういふ

の武家にはその光景を示し流るゝ
市あり華由家の名も感し流るゝ
之類倫修も記念の物に心くん
細末を祝屏と題えん(十月十日)
●南苑海列の著とて流るゝ己人の
集あつたに以てんハ流るゝ

祝の海列中 花川史山の流るゝ
泥研あふ即の流るゝ
ハ南研を而もろく感し流るゝ
大根河岩の市場に開いたる国外
んの大墨斗一と何人の目も忘

きん

の京都の本本海あり古年一版刻家也余入
流のり一夕流し且の其作早とて流るゝ
つべき年一版ありと流るゝ
す此の文印者居流るゝ木版も
も出るしと流るゝ余末に流るゝ
えすら流るゝ其の流るゝと流るゝ
批評を流るゝ其の流るゝと流るゝ

公子三志

身の中ありと流るゝ何れと流るゝ
せりあつた人生の大転を流るゝ

丁保し接し福の悦摺りも行し行
くこととを忘んくを唐の三味状態と
表現す云々

而然其う款も悦摺の状態も現る
自心とす云々是也 (十月十九日)

の露獨澳の悦摺の大を志像の外に
出つとすも刑の報に於て記す云々
悦九心丸をぬた (十月十九日)

の露獨澳四境に於ける軍兵
力の露獨四百個軍師団、獨澳八十八個河
國都會る百十八個河國而して其露獨
北ハワルシヤウも南ハカルバヤ山脈を

細く南方に達し約三万度とす一
日を日本の九百里に十里弱とあり日本
里程も直すと七十七里とす 八十八個
師団の兵數ハ一師団二万人と一七三万七
千六百八十八人 此多師団の數は三つとすと攷
り一師団一人の間隔を有すと一七二三列
毎並ぶ深とす 若し之んを四列縦隊と
行せしとす一師団ハ約三万七千六百
八十八人合して約三万七千六百八十八
十四里大の約す森と馬間を繞りて
さす悦摺の大見とす
文也の報に悦九心丸獨會ハ其死傷行

衛所の言に七十名人を果す楯の板
言の大なるも六約くべき也
○田原病死温熱中又一友人危馬の報
と接するその木打茶市の時その州の祀
前金を訪ふ事し以て満洲に出せん
とする言を聞きし種々のお話を聞かば
外しく都合よく其意の四つにけし
三階を降りたるを大合得る事し
先ある所を危馬とて記し留め
語る事と符々の遺之中打角甚めし
ゆおの古鏡ニニ言教の言ふ事
之しとてし其言を注射を

流すといふ事と直らざる事
言を確りしとて其言を
極む事ししとて其言を
また其言を寸寸とて其言を
とて其言を寸寸とて其言を
診ふ事ししとて其言を
腕用候事ししとて其言を
画の状に臨む事ししとて其言を
めりし望園と思ひし其言を
其言を寸寸とて其言を
んとせし口春村高田女婚
其言を寸寸とて其言を

ありたるも七元して原名の「**龍**」の字を他が
の字に換えたるを多し也 價廉なるをえ
と多く秀合を集むんと志し居るお板状
と稱して築中一のともを 製心あり
云本某也 (太正三三三 十月廿九)

○平山を名に依りて例のこゝに 漁る、板額を板
踏の山崎に移けるを利休の茶室をのこ
庵に揚げるを額を莫年しけるともあり昔
而に其の字を記しあり、角の一字を右
漢とてしる 古雅極まじり 外に掛物一板
借りたるけしとく 浮田一葉草を清物
茶室待(黄紙)秀)と云く 藤井也

の漢ありと云

と云く美作鳥の之我歎右方獨流
芳山ありと 乾お敵一寸八合黄紙
秀

ありと云く 中下山の一文字を秀の元
秀の字

(今上 記)

○十月廿九日 友人山内俊五郎と合作家本
堅物と稱の上 中下山を畫し、其下
車條 翠を畫し 中下山を畫し、其下
下部に石を描く、中下山を畫し、其下
時、おの歎あり 印に 乾山と云く、其下
其の由の人名を乾山と云く 乾山、其下

の子を山おとし一程は秋あり
石を掃くこの山は瑤とあり印に士道
と刻り未だ何人かを詳みるに
然るも悲しく何人かを詳みるに
お揃とろろりあるに是れ此の念はるを
粗暢るえと名に文人の事と成る
一概に葉つていこう

○十月廿三日の北の四原を葬り午前十元
しうあに西子道いああ十二の出棺(念)
中行列をあしともあふ福科生数る
前後に後ふ余も方中地あとい車し葉

リ棺車に尾しち山有坊に赴く、棺車ハ
子我大隈坊を葬り人のあつたるを
以て世に飾しけり、東の山有坊に
すべし路しきく午前十元、大隈坊の
自りて葬り坊に歸りて何事ありよ
りのりて一回塚とあひさう、あは余の
坪内の中路しとを代り坊の山有坊
すべし路しきく午前十元、大隈坊の
りて葬り坊に歸りて何事ありよ

(大正十一年十月廿三日)

吊辞

落葉風吹キ秋氣多ハ、
ハ多年教員シタニ田原尺ノ葬ハハラス
世ヲ奉ケテ混濁ニ趨リ海々々ハ潮海ハ志
衣子ノ節義操行ヲ俗々ラシム今日ニ古
リ熱波乃潔平ニ見ル所ノ田原君ヲ喪
フ誰カニ痛笑哀慟セザラン
辰資性執事且言ハ思ハク肺病ヲ有シカ
シ行ハ為ラズ至減マラ去ツ其志ハ古ンヤ
帝ノ心血ヲ傾ケ成ラスハ已マズ其友ニ交
ハルヤ敢厚其徒ヲ道守リヤ懇切廉潔
方

心身ヲ持シテ字ニ志ス一筆ノ研鑽三十年

造詣甚ク洋キモ常ニ韜晦シテ自ラ足ラズ

トシ病中尚ホ力ヲ示ス如斯キハ君ノ性行ノ

斑ナリ君ハ之シテ以テ母校創業者ニ本高開

シ百難ヲ排除シ今日隆運ノ基ヲ開キタリ

君ハ之シテ以テ幾千ノ高専縁科生ニ臨シ

能ク其徳瓜と感化セシメタリ或多ク父兄
 之レニ由リテ子弟ヲ君ノ家庭ニ托スルノ前
 後相踵キ幾多クニ上ノ有る者凡カ方々モ
 之レニ由リテ君ノ胸臆ヨリ生チ得ル君ハ
 本来その爲メ人ニシテ事業ノ人ニアラス故
 ニ一タヒ身ノ言業界ニ投スルヤ事概子
 祖執シ失敗ノ怖シク多ク是レ流俗
 ノ輕佻浮薄ト相合シス君カ人物性行兼
 深クコキクハ結果ニシテ必以テ君ノ人格ノ
 高キヲ決スルニ足ル君ニ絶テ敵ハナシ
 荒シアリトスルモ君ト會晤一ホカスレハ其ハ
 敬慕ヲ失フハ必無ナリ君ハ何人ニモ敬畏

ヲ受テ親友ニ君ニ對シテ襟ヲシクモ
 リ
 嗚呼君ハ素々ハ星ノ如シ地混濁ノ世ニ於
 テ晴雲齋散ノ間ヲ貫穿シテ一道ノ
 光ヲ放ツハ君ノ人格ナリ

ナリ
 其ノ校之ニ由リテ耀キ朋友之ニ由リテ之
 ヲ今忽ケ長逝シテ九泉ノ下ニ隠ル天兵
 間無限ノ恨ヲ訴ルニ由ナシ願フニ君ノ齡ハ
 未ダ耳順ニ達セズ滿腔ノ熱血ハ淋漓トシテ

前途ノ成功ヲ期セシナラシ志ヲ高クシテ地
ニ入ル其遺憾如ク日ツヤ見然レニ君ノ心
血ヲ澆キクハ之ニ校ハ基礎漸ヤク成リ長
ノ全副ハ近カリ吾國大女子ノ業ヲ卒ヘントス
君ノ宿願ハ身後ニ於テ必ズ達セン君以テ
瞑スベキ也一リ謹ニテ靈柩ヲ拜シ寸衷
ヲ陳グ情通リ神氣レシテ言フ所ヲ知ラ
ス

大正三年十月廿三日

友人 悠代



○里四方人馬方、延享年間
 の江戸地圃の飯木を板す
 幅四尺餘長二丈七八寸の板
 として古名榑子と延享五
 年の年節、あるとも、延享
 リ前のいよをも年節、改め
 リと定し、榑木を又出板
 元々変化更け、いづれと定し
 く板え、姓も七坪木と、此板
 木とち木信、信の石花と
 ち、ち木と多、飯味の人と
 其の花名、而もろき、いよの

延享五 正月朔日

榑木入市案

江戸

榑木

新法土屋中 中 中 屋 下 屋 上 中 子 組

うらやまの田のあかき木の花は此の
 里の方に向ふ所也 こんと矢張りあかき
 田のあかき木と云くつては、此の田を其大
 也 田のあかきの木は、此の田を其大
 ん敷 運喜今と云くつては、此の田を其大
 のまのあかき木と云くつては、此の田を其大
 印と云くつては、此の田を其大
 一期と云くつては、此の田を其大
 べし 林と云くつては、此の田を其大
 十月廿四日記

八回胞のあかき木と云くつては、此の田を其大
 子と云くつては、此の田を其大
 塔と云くつては、此の田を其大



しころとくしある^十林二りの天澤丸に乗るる
にるん心土月七の頃と物種とさきさきし
他の後之ききさる回々九月廿九の華盛
始(一)の物ワシントニ^二すまう^三の^四
珍四方候とせよ大統欽少井ルソレニ^五而^六
シコシツシス^七の^八池^九と^十を^{十一}侍^{十二}聴^{十三}し^{十四}の^{十五}親^{十六}
ウントウアノ^{十七}ころウアシントンの^{十八}境^{十九}を^{二十}
を^{二十一}拜^{二十二}し^{二十三}其^{二十四}別^{二十五}墅^{二十六}を^{二十七}見^{二十八}て^{二十九}午^{三十}故^{三十一}四^{三十二}務^{三十三}者^{三十四}
ニアライア^{三十五}レ^{三十六}氏^{三十七}を^{三十八}訪^{三十九}ん^{四十}し^{四十一}鳴^{四十二}る^{四十三}つ^{四十四}じ^{四十五}
ラ^{四十六}ん^{四十七}じ^{四十八}や^{四十九}の^{五十}を^{五十一}あ^{五十二}る

○木村兼市時其甲午後一の終と逝と往功
元定を^一就^二る^三更^四河^五の^六向^七部^八解^九割^十を^{十一}行^{十二}ふ^{十三}り

多と腰石と冷せりえし^一の^二間^三へ^四と^五又^六ん^七心^八は^九腰
汁^十の^{十一}固^{十二}結^{十三}し^{十四}と^{十五}し^{十六}る^{十七}若^{十八}干^{十九}あり^{二十}腰^{二十一}石^{二十二}の^{二十三}身^{二十四}
く^{二十五}り^{二十六}と^{二十七}さ^{二十八}る^{二十九}腰^{三十}石^{三十一}と^{三十二}肝^{三十三}候^{三十四}附^{三十五}着^{三十六}し^{三十七}六^{三十八}東^{三十九}
ま^{四十}し^{四十一}為^{四十二}り^{四十三}腰^{四十四}石^{四十五}汁^{四十六}停^{四十七}師^{四十八}固^{四十九}結^{五十}す^{五十一}ま^{五十二}り^{五十三}
り^{五十四}と^{五十五}さ^{五十六}る^{五十七}固^{五十八}山^{五十九}の^{六十}身^{六十一}と^{六十二}ま^{六十三}り^{六十四}と^{六十五}行^{六十六}く^{六十七}の^{六十八}お^{六十九}作^{七十}
と^{七十一}あ^{七十二}る^{七十三}法^{七十四}名^{七十五}の^{七十六}あ^{七十七}ち^{七十八}と^{七十九}と^{八十}示^{八十一}す^{八十二}と^{八十三}又^{八十四}ん^{八十五}ハ^{八十六}徳^{八十七}
鏡^{八十八}院^{八十九}和^{九十}不^{九十一}動^{九十二}し^{九十三}た^{九十四}を^{九十五}り^{九十六}仙^{九十七}鏡^{九十八}院^{九十九}と
千^{一百}鏡^{一百一}閣^{一百二}と^{一百三}し^{一百四}と^{一百五}え^{一百六}り^{一百七}と^{一百八}る^{一百九}と^{二百}多^{二百一}数^{二百二}の^{二百三}鏡^{二百四}と
り^{二百五}と^{二百六}上^{二百七}と^{二百八}し^{二百九}と^{三百}し^{三百一}と^{三百二}し^{三百三}と^{三百四}し^{三百五}と^{三百六}し^{三百七}と^{三百八}し^{三百九}と^{四百}し^{四百一}
と^{四百二}不^{四百三}動^{四百四}の^{四百五}鏡^{四百六}と^{四百七}し^{四百八}と^{四百九}し^{五百}と^{五百一}し^{五百二}と^{五百三}し^{五百四}と^{五百五}し^{五百六}と^{五百七}し^{五百八}と^{五百九}し^{六百}
所^{六百一}と^{六百二}し^{六百三}と^{六百四}し^{六百五}と^{六百六}し^{六百七}と^{六百八}し^{六百九}と^{七百}し^{七百一}と^{七百二}し^{七百三}と^{七百四}し^{七百五}と^{七百六}し^{七百七}と^{七百八}し^{七百九}と^{八百}し^{八百一}
あ^{八百二}の^{八百三}部^{八百四}林^{八百五}と^{八百六}と^{八百七}と^{八百八}と^{八百九}と^{九百}と^{九百一}と^{九百二}と^{九百三}と^{九百四}と^{九百五}と^{九百六}と^{九百七}と^{九百八}と^{九百九}と^千



蛭子溝産出し 十九日 下り

右産出し中菅葉町 午後七時半
廣告に候約己釣ごう二千枚 新道四種之止

十九日 晴天 入場人員 二万四百零五人 (下駄孔了 概算也)

現金売上 五千六百三十九圓三十五錢

掛売上 二千二百五十六圓十三錢

美引 二件 其他子故十

十六日 晴天 入場人員 一万六千九百二十人

現金売上 四千六百九十二圓八十九錢

掛売上 九百八十一圓十四錢



十七日 朝来 神嘗祭

入場人員 三万二千人

現金売上 四千九百七十九圓八十九錢

掛売上 八百五十九圓三十八錢

十八日 朝来 雨

入場人員 一万千八十人

現金売上 三千百七十七圓五十九錢

掛売上 五百十九圓十七錢

事故 二件



十九日 晴天

入場人員 一万八千五百四十人

現金売上 四千九百六十二円六十一銭

掛売上 八百九十七円八十六銭

子故十し

二十日 降雨

入場人員 一万一千二百五十人

現金売上 二千七百七十八円六十七銭

掛売上 八百三十六円六十三銭

子故十し



二十一日 晴天

入場人員 一万四百四十人

現金売上 二千四百二十一円五十三銭

掛売上 五百九十六円六十一銭

子故十し

従業員 百七人 事務員 雇員 女店員 係人 共

外 臨時傭 七人

子傭人 一百平均六十五人、割

右の右より 總売上高 三万五千五百三十九円三十七銭

一日平均 五千七百七十七円〇六銭、割



先の大略右如文治身之有之昨年、同表出し之於之
 業上總計六万五千圓之比本年、三万五千圓ハ
 半頗強之過也、其後業店員日下昨年、年数
 弱ナルト業出し之要し経費カ本年ハ景氣弱ク
 全廢之其他萬子餘約既之結果凡ソ昨年、
 五分一ニ足り算子算ズルハ先ハ成績良好ノ
 方ニ於座候

右概略ハ報告ニテ断、如クハ座候仰承時節カラ
 以身体以大切ニ成下る在事希上候

子ノ如ク
 下村正吉郎

○先以私商ハ後部ハ先流カ中山英子
 柳原英子ノ才前ニ也と由心先流ノ
 二英子ハ好し御母ニ也と由書翰者
 尚中ノ也、二英子ハ其ノ評、二事ノ事
 明チ、之カを以、二事ノ事ノ事ノ事ノ事
 漢係子或カ明、二事ノ事ノ事ノ事ノ事
 氏ハ、二事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
 ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
 ハ心先流カ、二事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
 則、二事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
 二事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
 二事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
 二事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

柳原氏墓誌

王母諱登聞子稱光姬姓藤原氏柳原前大納言隆
先卿長女妣正親町三條氏文化十四年十二月廿
七日生於京都及文明夫人歸于水戶烈公王母從
焉時年十五稱園浦仕夫人數年又侍烈公後以公
命嫁國老松平將監諱頼讓實王父也生三男一女
及王父卒去髮號心光院王母資性慧敏嗜和歌又
善琴嘗受秘訣於紫檢校之晚年居東京小梅徳川
侯弟時春秋已高荐遭家難處之晏如絕不見感々
色侯以其舊故特給養老之資遂得不匱明治三十

原稱用紙

九年一月患中風二月二日遂不起壽九十葬於北
豐嶋郡染井原若其世次詳於王父墓誌

のそとより
二男らもまき
首飾り
す所の
人

○十月廿九日
悦山の
うた
詠
所

人伊原揚岐の
峯掛い
悦山
○毎
例
て
の
こ
少
三
西

まゝ明末のしよのこゝと一日傳心と云ふこと
ゆひち一首あるかと中蜀と歎しと云ふこと
又思ふにふたつあるものついでにぬるや海欵
とあるものも是れ字のうらやまの如し
七条の字底に之の字ありて極みの出位若
石候の揚揚の由と云ふ二枚出の字又二
條の一枚を録物に既音を揚と云ふこと
新伝傳高由實二千ををねん辨ひ
たうこと此の揚の字も七条を候の心
付しと云ふこと此の字も立流るるつたつと云
り四十五の字と云ふの候之字も立流るるつたつと云
候の字も家名をねんまげんは辨ひ極と云

しと極おのしよのこゝと云ふこと五字の象文
を刻し極のしよの代り
葉の字も志と云ふ 此は霞の大明法に入
りし極の揚物も此の字も立流るるつたつと云
候の字も家名をねんまげんは辨ひ極と云
七年お終の天保山沖に入りし極
幕下より注を極に合しと云ふ候をある
しと云ふ注を極の揚部と云ふこと
しと云ふこと一外船の耳港に對し仰
々しきことと云ふ滑秋なること此の極
上部にもあつた又高ひつと云ふ候の
事あり候と云ふこと 船中 異具約々

この頃より舟を造りつとて其の舟は其の
りてをえりし何うべし其船は其の
るんハ海石の價ありともえんきう
中よりあるりし其の舟の某家像
の故りしとていふこと

○山内一印は世中董物多言けり四五
の校及りた記をうり遺物を世に
存留し今にえんこと目録に
記し明細をのりてとていふ
と今も序と記しつとていふ
一と其の序と記しつとていふ

菅川

菅山内君歿して後改二十二年 皇義きる
伊門生君の首像を作し之れを早稲田太
学にて置き今又君の遺物を編して版に
上さんとし余以て君の首像を作し可
う遺物を記しつとていふこと
す何んともんハ君の生前家十生前都部
の初御施徳に授けり遺文三章
元棟書とていふこと多作君の如き操
舟航者流に於て其傳を見ざる所 君を以
つて一社教社の記号とある事 可なり
●天下之記号とていふこと 舟大志末書氏の
事

さうしこころ君の論文天下如何なる新書
此も揚げんさういふ然る即ち天下の
新書君の論文を刻し天下の新書
此こそ君の偉大なる遺行とて
さういふも永く江湖に傳へし何んか特
に遺行を刻するを要せんと思へ
へく君の遺行は爾々天下に満つと
日又坐衣を置き君を思ふの科と
すさんまの餘り足踏漸くして其所
載の文章は後今獲ること難く
大書も餘書を抽き一冊子を作る
敢て不うとるさんと終る訂生徒氏君

意に金田の事

君の文章の達人なり君の文章
文章は君の文章の才を有する君の文章
ハ動もてん心死漫に失し構解を填まざる
瑕此あうしといふ君の文章の才
此一以て筆を下せば一萬千里の
横奔放美人と書く所を知らざるの概
あり然しと未書をなす元を属する
その文章の才を尋ねる君の文章は
読復字改削せりめ何なる大論者
七筆を下す君の文章の才を尋ねる
少論説の如き文章を對論しつて筆

一なること珍しくいふなり如きこと君は日
の四重乃至^中の新奇社に私しきん
の投符を為すことを得たり健筆君の
ぬきん其に稀有の例と謂はせる一の
君の文章一と一符謂ふ可きなる趣味
あり而して佳く三句五句を極むる
神来の花文なり、是れエンスピシーレヨ
ンとして筆端に迸り出る所と云ふ
面白身七思ひ構ひたる所と云ふ
荒し表う三十餘年來日々欠る筆作
しき大士の論文を悉く蒐集し中二乳
き粹と稱するの便利なりなること云

幾千の花文を羅して一大巻を成す
決して難きものあり然れども今この便
利とゆふを缺くを遺憾とする本書に
ある所の君は長柄前君の傍に保
然存しき都部の流を感懐中より
採りていふことしん^抄 筆の
執筆に係り概して君の拙筆を注ぎ
ていふものありや勿論也^也 代表的文
字千々ありて也且つ君國と漢文
と辨りて漢文に長せり^也 所
漢的戯文その宗旨代の課題の漢文
と云ぬものありて^也 君の志に及する

之のあんな然れども既に君の権威は天作の
 新皇あり刻しは日月に傳はるる也上り
 寧ろ都を遷すは長州に於て刻するの印
 こそ可なりと云えし流人や貴し君の心を
 既に目的傑心を懐入んとするは是れ
 以て君を信ぶの料 資りと云へんとす
 於ては也
 刻の改に迫り頌叙を促すこと急ぎ
 乃ち如手所徳も記しと告首に慶く
 こそす

大正三年十一月

友人 市島海吉識

日英の陸軍の弱きこと流しより海軍を世
 界に誇るは陸軍と云ふは其の實を説き
 陸軍の強しは海軍の強しと云ふは其の
 形式のみを論ずるの事也 陸軍は大体
 兵の多しを以て強しと云ふは其の
 英王政體の二強を以て、大隈の海軍
 又日本も英の如く兵の多しを以て強し
 たり。然るに其の強しは其の質に在り
 其の質は其の兵の多しに在り。兵の多
 しは其の質を以て強しと云ふは其の
 也。陸軍の強しは其の質に在り。兵の多
 隊の強しは其の質に在り。兵の多しを以
 こと云ふは其の質に在り。兵の多しを以

依乾じりことうしとを其の聲のく促る圓
 家の事のことと恐福に附することとまこと
 松にも土圓う福をく由義うくさんて起つ
 と一般、えりうくくつうのつうぬ圓紐を纏
 英のゲロに侍志志きうし日本軍一の先ん
 を論す極高側古田軍一五十萬先んせ
 バ成る容もに決せんとい西日に成
 すとい云ふの泥うすうすうに指しさす

○昔を義勝の用事候に清甲候も形
 たり引札の木板三枚をう取おの初の外
 の為津田の輪廻しと居るをうし其
 物木と云ふもあつたさまのゆえに而も
 くまをゆきうくまを家振本坊うくま
 くまを扱を指し候や回るる世も乗合
 馬車の一賣をうし上段に馬車の圓
 指し候もうさるるの事もまつるあ
 三和と可うるうくまを指し候も
 多にしんん中河とあり一と在る指し候
 可御る乗合汽船の店をうし代料を
 人前をうし分売とあり一ハホーンと乗人

のりえ 鏡山孝教の著をとり
くろくを文にぬた 授

余五里科かぶと松二十年の間全
船路を掘出し生業をせしむ今
日本人の命に恩をまね船名先
オの山をよき右橋を地出し傍
地力と以てある者の日本地より
鏡山そのゆび其地の学科を授
授し最上名の術を得せしむる
お市の約を乃てんことをしん
ホー
解

お思ふはるを、御仁、染地お二ん
後め津の氏まで御もし
ゆり合てりそに上

の桂身石倉の石川流方著、^{米丘}平雲山の橋
是一軸を辨の墨氣淋漓一紙風軟
味お入るは、自後わうち年
め昔もあわを流る舟に訪ひて分
南河守意二遠山あ画冊の生月
とを念親し其のそ古画を取
と寄しとるものとき侃高
くも好しと書とに、而して自家
人西の未と流行せり、海早く、

一程のれ 格を仿 儀を見 格を 仿し
不談を 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
其のの あり 此の 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
其 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
之 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
酒を 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
汗 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
二 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
七 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
持 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
ハ 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し

二 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
家 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
酒 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
買 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
多 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
果 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
日 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
と 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
く 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
上 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し
方 格を 仿し 儀を見 格を 仿し 儀を見 格を 仿し

の才目なるを其の由報務流り込の
日二十午前十百の掛船く出(出)へ出地
才乗船を東洋汽船会社天洋丸(丸)と二
時(時)ランチ(中)中(中)船(船)と被(被)し(被)換(換)渡(渡)の(の)迄
港(港)の(の)停(停)留(留)中(中)し(し)つ(つ)て(て)船(船)の(の)長(長)を(を)印
あ(あ)う(う)ん(ん)ち(ち)を(を)船(船)下(下)に(に)立(立)し(し)て(て)そ(そ)の(の)捨(捨)度(度)満(満)ま(ま)さ
う(う)も(も)さ(さ)う(う)く(く)本(本)船(船)に(に)入(入)る(る)を(を)許(許)さ(さ)る(る)其(其)の(の)
其(其)の(の)長(長)指(指)を(を)指(指)の(の)く(く)て(て)甲(甲)板(板)上(上)に(に)現(現)え(え)出(出)、
船(船)を(を)振(振)つ(つ)て(て)先(先)の(の)さ(さ)を(を)被(被)す(す)先(先)の(の)目(目)に(に)
あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)此(此)船(船)の(の)四(四)段(段)ま(ま)ち(ち)の(の)ま(ま)き(き)こ(こ)と
う(う)し(し)上(上)下(下)あ(あ)ら(ら)ま(ま)と(と)約(約)五(五)七(七)分(分)此(此)の(の)此
言(言)の(の)前(前)の(の)の(の)味(味)あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)由(由)を(を)船(船)に(に)

へ(へ)は(は)あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)許(許)さ(さ)ら(ら)ん(ん)勝(勝)つ(つ)そ(そ)の(の)先(先)き(き)ま(ま)こ
船(船)様(様)を(を)其(其)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)余(余)も(も)
種(種)々の(の)意(意)味(味)は(は)於(於)て(て)君(君)の(の)健(健)康(康)を(を)祝(祝)す(す)と(と)
笑(笑)う(う)、旅(旅)の(の)難(難)の(の)お(お)も(も)た(た)り(り)難(難)伴(伴)ひ(ひ)の
あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)て(て)回(回)る(る)死(死)
去(去)ら(ら)ま(ま)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)て(て)笑(笑)う(う)
す(す)ら(ら)の(の)死(死)し(し)た(た)ら(ら)ん(ん)こ(こ)の(の)余(余)の(の)報(報)先(先)に(に)伝
り(り)あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)て(て)笑(笑)う(う)
と(と)深(深)く(く)も(も)あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)て(て)笑(笑)う(う)
る(る)死(死)し(し)た(た)ら(ら)ん(ん)こ(こ)の(の)余(余)の(の)報(報)先(先)に(に)伝
群(群)の(の)死(死)を(を)あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)て(て)笑(笑)う(う)
と(と)深(深)く(く)も(も)あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)て(て)笑(笑)う(う)
と(と)深(深)く(く)も(も)あ(あ)ら(ら)ま(ま)の(の)先(先)の(の)さ(さ)を(を)指(指)し(し)て(て)笑(笑)う(う)

瑞西あるうり 舟をとり一向の舟に乗りて
心を痛めたりる 皇の欠乏するに
心は 現に 強け
るを かく 隠さる 位なるに 如何なる 船
行に ありし とも 一向の 舟に 乗りて
此の 証の 大儀に 候 候る とも 候
の 重報を 申し 候 候る とも 候
こころ 林檎助と して 雪報を 申し 候
昂の 船の 舟に 候 候る とも 候
さう け 共の 舟に 候 候る とも 候
とん とも 候 候る とも 候
ふ 船の 舟に 候 候る とも 候

一、この 舟の 舟に 候 候る とも 候
の 船の 舟に 候 候る とも 候
こころ 候 候る とも 候
回 ありし とも 候 候る とも 候
或る 舟の 舟に 候 候る とも 候
後 候 候る とも 候
又 候 候る とも 候
何 候 候る とも 候
ト ありし とも 候 候る とも 候
現 候 候る とも 候
く 候 候る とも 候
混 候 候る とも 候

了所に伝ふ其も其地可別んを
又其地の銘多の諺の考を要す伝之考
而を以て其の伝を一向回差とゆふを
傳候て出づけとせんか銘多銘前人を
以て填塞しうてくは銘内入る能
ひすじとくく引えり御考別りせん
口候ひの果てしうて致すハ極一科
を以てしと其外入るうと在りし
衆人を押し分け強ておあぬも
銘多の考もむ日る記あるとせん
ゆふすを石立くと前に出しは治事考
も傳候物もあも切らうと銘多の札上

日有しとて其地可別んを
りも其地の銘多の諺の考を要す伝之考
しゆくの考もむ日る記あるとせん
く候ひの果てしうて致すハ極一科
を以てしと其外入るうと在りし
衆人を押し分け強ておあぬも
銘多の考もむ日る記あるとせん
ゆふすを石立くと前に出しは治事考
も傳候物もあも切らうと銘多の札上

わうと北の新地をさつしつしつらふの事
内政の事と現をさしつらふ

政海と今も死法の修る経緯さうきつ男
ふらふらと女分のめり職事とのめりを論じ
す政体と主とさるを得ずとさるふりゆ
イツリスフスタートヤヤブリウゲのめきも
四五十年のそのものあこしはもと政体と赴き
僅に千人とさるふらふとゆふり柳を仕末
前のあしと政体と無意とさるふらふ使
丁もむと二ふり目とありとえんたゆ
さうさうつとさる柳をさしつらふと電車
の車とさるふらふとゆふり日と操り

こゝろを論ず

五米利加ふ格とを政の大使とせしめ井川
大後領と過しつらふ民とみとハラとえ張る
元首丈の格とを存し仲年と過を受
くるとさる能ふ也自入と継年と井川
ソレの大著政法とを及論するの事
者と民とさるを民の事論とあらふ
ことあり活法やさうさうとさる
しつらふやと試やとさる破とみ記帳す
の事を得る大後領と過しつらふ米と
うと能ふの民族同位し統次とさる
而創る自分と可成る公平とを力と

云々日米河を離るるを云々云々云々云々云々云々
扱りに注意を要するも後々々々々々々々々々々々
後々々々々々君の湯を云々云々云々云々云々云々
也々々々々

え来ルルがツエントハ我々の云々云々
井上リンの云々云々我々と扱及我々云々
我々の云々云々と云々云々云々云々云々
リシ云々云々しう大云々起り眼云々
塔云々を云々云々来人云々我々来(ま)り
く平和を思ふ云々云々云々云々云々云々
云々云々人云々と云々云々云々云々云々云々
来云々云々の云々云々云々云々云々云々云々

獨しを云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
非獨の云々云々云々云々云々云々云々云々
来人の云々云々云々云々云々云々云々云々
と扱云々云々の云々云々云々云々云々云々
云々云々日本云々云々又云々云々云々云々
流云々云々の云々云々云々云々云々云々云々
グライアン云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
云々大畏の云々云々云々云々云々云々云々

つせしめりて遂に敗れんとす。又表の的を
リし一而して伯を在る人なりしと云ふ伯内
谷の首領に列し（今も又内容を在る伯を
余とて偶れ境を）同のいふことと云ふ
活流の道に身を居るも、その汽車中の活流
（記すもいふあり）とて、さきさき
とて、分は信じて、あつて、えん、出ゆ人四五
かうつと、つたし、とて、填め、なる、無ん、とて、字
生流代と枝歌とを、吟し、先日、景、快、景
去と自動車とに乗し、（今、枝り、行く、活流
軍才（すゝ））（同、旅、と、ま、る、評、民、新、年、す
柳つ、昔、工、年、の、我、も、教、正、列、業、を、美、美、し、ん

新の（すゝ）伯内、枝り、伯、ち、景、族、と、世、
ゆく、と、三、報、の、杯、を、さ、る、け、と、を、と、を、祝、し
又、日、乘、の、さ、る、伯、と、枝、り、と、あ、る、（十一月六日
祝、の、さ、る、記、す）
○我、邦、の、一、時、ゆ、女子、の、後、み、物、し、は、是、を、行、ん
と、く、さ、る、あ、と、さ、る、い、の、と、日、本、物、の、
し、の、と、さ、る、と、也、細、字、の、と、書、月、の、月、の、
又、後、み、物、の、と、也、漢、字、の、と、文、之、と、あ、る、と
之、を、後、を、い、ふ、と、さ、る、い、漢、字、の、と、後、の、と、
此、書、物、の、と、也、書、物、の、と、文、之、の、と、文、之、の、と、あ、る、と
活、流、の、と、也、活、流、の、と、各、頁、の、と、而、の、と、
全、冊、活、流、の、と、連、続、す、而、し、て、活、流、の、と、概、し、と、枝、り

を物あるうへに今出来のこゝに、物細のあ
まじし北のうら流動言をいふと、とてつと思ひつ
けるは北のうら我合を本をいふは、後向を
今も、ハノラで式とて、いふの也、さきも、あ
まじし、流井の流、め、のこゝに、一、字、う、書、画、を
こゝに、う、る、もの、也、得、ぬ、ぬ、ハ、ノ、ラ、で、式、の、讀、み、物、を
江戸、め、代、に、ユ、ル、得、ぬ、ぬ、を、自、我、文、の、界
の、流、り、り、と、う、ら、う、る、は、二、洋、う、於、ち、も、又、日
本、に、移、る、の、流、動、者、と、い、ふ、こゝ、に、思、ひ、つ、と、い、ふ、海、島
繪、畫、を、連、絡、し、物、得、う、の、経、路、を、流、る、の
者、冊、千、う、ホ、ウ、出、づ、而、し、と、日、本、に、於、ち、早
く、著、述、せ、る、ハ、ノ、ラ、で、式、者、海、島、の、何、れ、を、表、し、

利らざる

(十一月七日)

○杉平破天意と今、中、佛、し、塩、原、の、う、ら、に
流、る、破、天、意、回、り、塩、原、の、喜、多、成、の、境、に、
立、し、北、に、一、碑、文、を、著、す、即、ち、奥、邊、の、尾、
崎、如、家、の、書、を、記、す、と、い、ふ、こゝ、に、塩、原、の
後、を、以、て、い、ふ、ぬ、ぬ、し、と、い、ふ、の、を、北、に、
す、う、出、ま、ぬ、其、の、書、を、後、世、に、傳、へ、ん、と、い、
ふ、こゝ、に、一、碑、を、建、ん、と、い、ふ、の、を、
塩、原、の、邊、に、立、つ、る、余、の、書、を、著、す、と、い、
ふ、こゝ、に、自、腹、を、叩、つ、と、い、ふ、の、碑、を、
塩、原、に、立、し、と、い、ふ、こゝ、に、
つ、ま、り、出、で、入、生、す、と、い、ふ、の、

この頃、あつあつとあつあつと七回成るうとを深
く喜ぶ

高田のちの藤枝系訪る活や四半
ハ文意をもする出ずるう増多あり
と云 *Walker Scott* の名を合し或は格
Walker *Masterly* ウォーカーアーリー
と合し *Masterly* の名を合し或は格
七若し之を無きとせしむるは
無し此の海味はるる増多を直後具
するを要す

日ち此と我軍の志願して後まゝのつらさを
注とんを流改めたりと其の旨を前と

(明治二十五年三月十七日第三種郵便物認可)

報知新聞

外號

大正三年十一月 日

發行所 報知社
編輯人 中村政雄
東京市麹町區有樂町三丁目一番地



青島陥落

唯今青島陥落せりとの
報ありたり

漸く如きち終を臨み及ぶるに及ぶ
く七ニ三内弓と要ありへしと何人七幼

明治二十五年三月十一日(第三種郵便物認可)

東京朝日新聞號外

大正二年十一月十日 午前十一時三十分發行

青島事實上陥落

攻圍軍の作戰効を奏し

青島は事實上陥落せり

●イルチス以下

砲臺占領

七日午前七時我第一線の一部はイルチスビスマ
ルクモルトケ砲臺を占領せり敵は午前七時頃天
文臺上に午前七時頃海岸堡壘に白旗を揚ぐ
中央堡壘の奪略に引續き左翼隊は本七日午前五
時十分小湛山北堡壘を又中央隊は午前五時三十
五分臺東堡壘を占領せり中央堡壘西方仲家
窪砲臺も亦其重砲二門と共に我有に歸せり

(七日陸軍省公表)

東京市芝浦區山崎町四番地 發行所 一印 刷 人 沼 田 寅 次 郎 行

七しんきさきまきあひる早く本ら海軍
とあふ(十一月七日)

○坊のあはれ(是)の家世に若干今を交るるや
へり此の服印減一の葛として出物して
奉定信法二冊を圖書録に寄附して
校する此書こそ是道邊の三冊四冊を在
る中一冊の字を去るありし時とありし
事と正しとを泡やわし新に録し中流マルユルム
事と大印法村(為之)の著に係るる今
に此書埋没し人を知る偶に存するも
此部減一の書としてそのありし人も
あつたの自心とし思ふものがある
ては學法村のの著をいふんとす

思ひも寄らるる也あめればゆるる之
を評し、これを波部抄移りあめ文壇に
のり名後うわうとを心と題するの
りして思へ、護る其の為するに
るる洋本も本も銅的挿絵ありし
印辨の心も人も早稲白ちるるに
とるるき、記念抄うらうを心と
書首に、石しづきしを法ある圖書
にありしころやう、其の心し、
此書に余のうらうを在るありし
ありしとせ、誠にし、
也に、
湘

村云里表の記を傳ふる節も三章宛あり今
一と之を讀むは是は偽世の付或る其
はしと見え明命十五年 或人の因縁を
とて其書付と交渉の末附印城
一氏の名を飛うと出放す心こころし第
場の都宛るをもあつと遷延し十七年
こゝろと流る世に出むとて出り梅旋
ハちとよす傳り大なるしや日記
かゝる出放の消息をばせんといふ
こころしと年をばさるころとこころし
をんるんをば附印氏記とあらとも文
章ハ或人と考く元のまゝとらう只書

初に控へる録の順序をそとて歎
倒して原始的の結構を破るころと若干
の割記を加ふとて控格氏の終部の
考 わづらん也日本武に引互しとて
似又使らるしとせんといふころと
系譜名の異つたころと所記誤記も多
く文も拙く尚ほあるとて中もあつた
ころとては三十餘年前の思ひ
出の考をいふころと

大正三年十一月廿七日

坪内逍遙

書名を余に其の考を尋ねしおき

然るをちりし折りし觸れしを何新の關係を
忘印ししをいひしき言を吐くこともある
らしむる時自分もヤツキとありしを言ふ
れをたゞも君を自分の從僕と必ゆよと云
ふていふのし改められし比根を心
直せしむる氣を無いつ、即ち單純ひか
たせしむる氣を無いつ、即ち單純ひか
るを言ふつとゆふことなほ未だ……云を云
へば、其の意は是れ女の心と我の心と
の、増ゆる限りし、分るる我れは、
若し、ちりし折りし、外に、
ハ、話し、し、と、横切、り、
十二

く教育に關する政令の親身語、ゆゑ、その
不、感、と、政、令、の、政、令、の、政、令、
に、於、て、其、一、く、體、育、に、重、き、と、
中、の、能、力、の、教、育、法、を、改、善、し、
く、時、代、の、英、雄、を、我、れ、が、
降、臨、す、る、代、の、め、目、滿、ち、
を、終、り、外、國、情、を、あり、し、の、
を、し、め、ち、り、し、の、後、に、
を、之、れ、に、し、め、ち、り、し、の、
す、め、に、漸、く、情、を、あり、し、
の、情、を、あり、し、の、情、を、
の、情、を、あり、し、の、情、を、

物に捨る也 絶対及對ひり

○エール大子が行き終るに雨合を求
めたる生格維打る居りし御中
貴成る事外可き事出末ぬと云
ふて漸くん比女とありしやけは
る中大の合御ひあつたとき未
びを名角福子の老母り口：及
の潮流り成えりるるを其全
満家りエール大子：二千葉田の
死後其跡をみるの遺て物を作り
之れを其大子：思くはる所事
曰るその心記その事おぬ授る

福子入ひあつて、その生ん福子
自慢を老き全湯家、そのと懐
しとそのあ授を解縁せしむ
これ遺て物を元治すもひんぬと
ちその自をえい進む大子あむあり
あ流衣にそののののののののの
断つて世をすそのの多敷ひあ
つたとややくと、あはれとあひん
る、うつと、あはれとあひん
あ

○まの樂浪とて奥の山(純)の福子を
まの政のつ人其のふしをまの切に
りまのその三のち中の一のち地を
歌長

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二



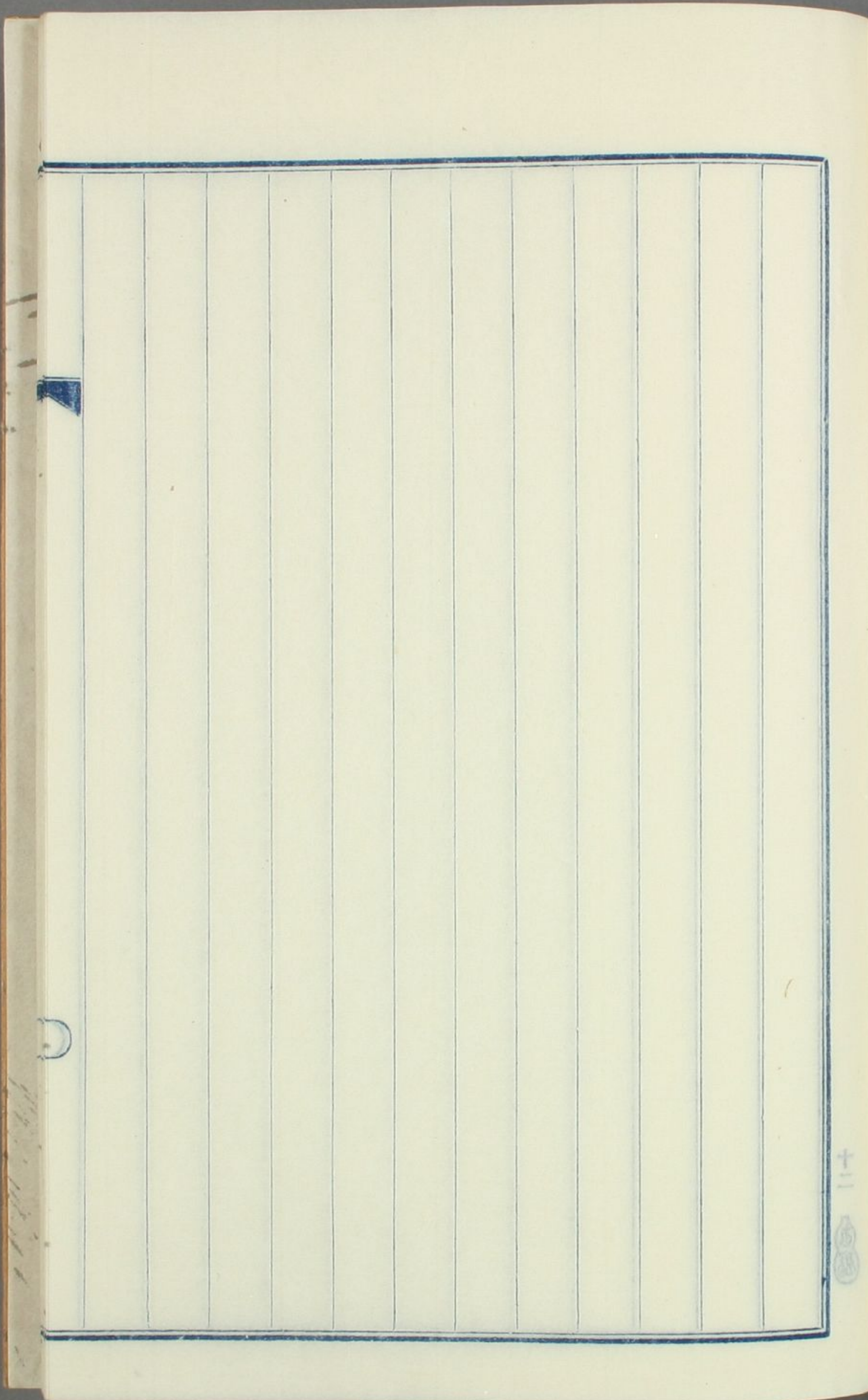
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二



7

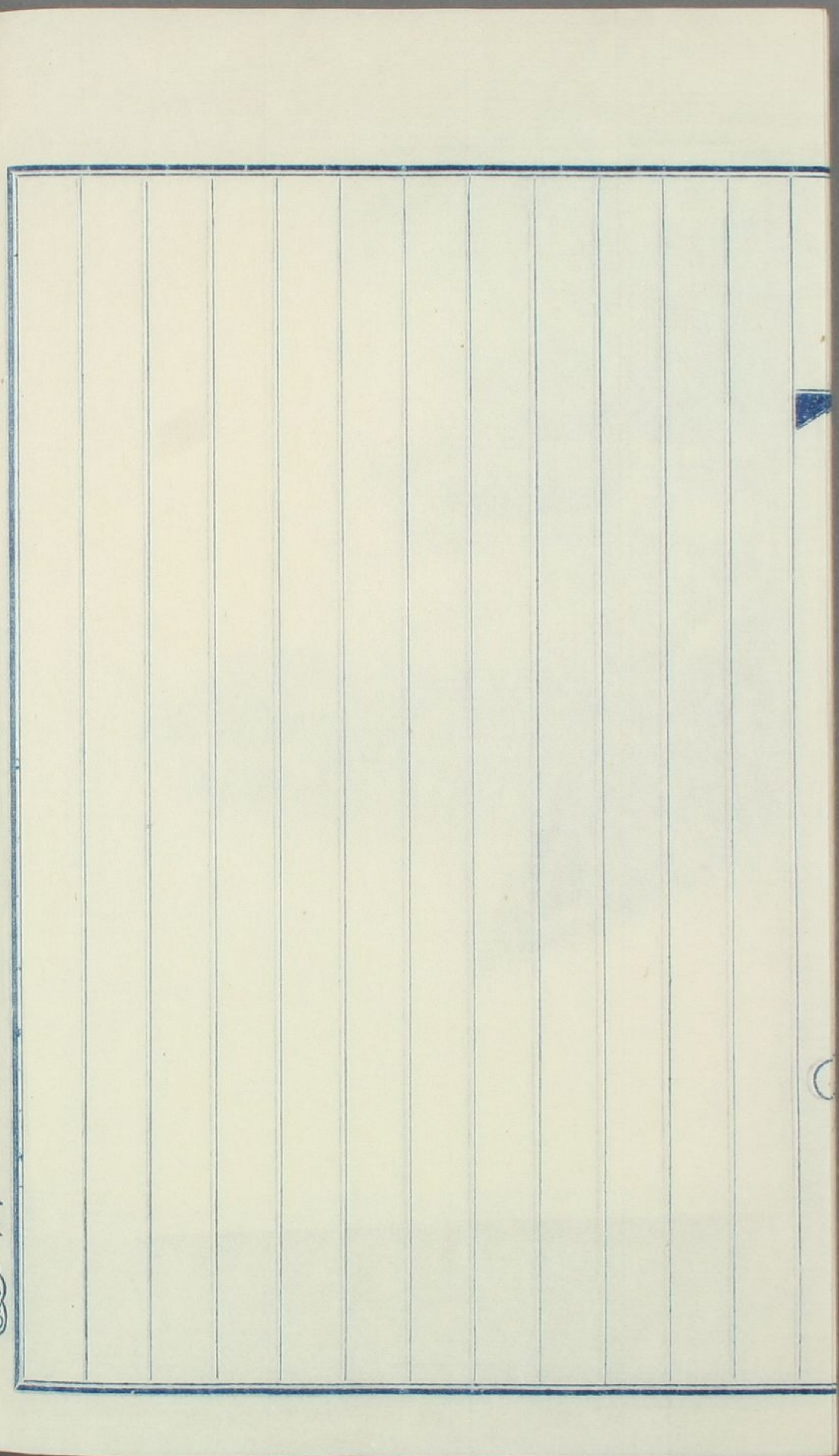




十二



十二



以下全て

白紙

